



朝一小だより

活気があふれ、心が潤い、一人一人がより良く生きる学校 789

Tel048-461-0052 <http://www.asakadailshou.city-asaka.ed.jp/>

学校教育目標

- ・考える子
- ・やさしい子
- ・たくましい子



朝霞市立朝霞第一小学校

令和6年2月1日

児童数 585名



真実は人の数だけある

校長 金子 二郎

今月4日の日曜には二十四節気の一歩目、立春を迎えます。しばらくは一年で最も寒さが厳しい時期が続きますが、保護者や地域の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。3学期になってから校内でもインフルエンザや溶連菌等の感染報告が後を絶たず、健康管理にも緊張感が求められる日々が続いております。一方、能登半島地震発生から1か月ほど経ちますが、避難所での生活が長引き、ごく普通の学校生活さえ送ることのできない現地の子どもたちの様子を目にするたびに胸が痛みます。



さて、学校では4月からの学習や生活を振り返り、次の学年に向けて準備が徐々に始まっていますが、これまでの10か月ほどで一小の子どもたちは様々なことを学び、大きく成長してきました。集団生活を通して心も身体も鍛えられてきました。協力して何かを成し遂げる達成感を味わう一方で、時には意見が対立する時もありました。それ以前に、些細なことで諍いになることは数えきれません。

当然、誰かが仲裁をすることも少なくありませんが、「自分が正しい」というお互いの主張がエスカレートし、簡単には収まらない時もあります。田村由美さんの「ミステリと言う勿れ」(小学館)の中で、殺人の容疑をかけられた主人公である大学生の久能整が、任意の取り調べを行う担当の青砥成昭巡查部長と署内で次のようなやり取りをする場面が出てきます。容疑を否認する主人公に「どれだけ虚言を尽くしても真実は一つだ」と言い切る青砥に対して、「人は主観でしかものを見られない」「(人は)それが正しいとしか言えない」「AにはAの真実がすべてで、BにはBの真実がすべて」そして「真実は人の数だけある」と応えます。



トラブルを解決しようとする時、学校では事実を明らかにしようと努めますが、それ自体が目的ではありません。というのもトラブルが起きた場合、どちらか一方にのみ非があるケースはむしろ稀であり、双方が自らを振り返る必要があるケースが少なくないからです。それぞれが自分にとっての真実を語った上で、どうすればよりよく学校生活を送ることができるかを

一緒になって考える時間を大切にしなければなりません。どちらが正しいか判定すること以上に、互いが多くを学ぶことができるようにするために、大人としてどうかかわるべきか、その都度、しっかりと考えることが私達にも求められます。一般に1年生と6年生ではものごとを考える「土俵の広さ」が大きく異なります。学校でも相手の立場になって考えることの大切さを子どもたちに伝えますが、6年生は思いを致す対象が圧倒的に増えます。時には、その立派な姿を見て大人としていかに自分の料簡が狭いか、恥じ入る時すらあります。人生の先輩という面からも、感情に流されることなくどのように振舞えば子どもたちに範を示すことができるか、常に考えなければならないと身が引き締まる思いがします。



自分が思い込んでるものが必ずしも真実だとは限らない (ジーン・バーキン)